みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

宣教師と博物学：
ジョージ・ブラウンの博物収集の歴史的位置

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 林, 勲男 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00002255

宣教師と博物学

－ジョージ・ブラウンの博物収集の歴史的位置－

林　　勲　男

（国立民族学博物館）

1．はじめに

国立民族学博物館が所蔵するジョージ・ブラウン・コレクションは、メソジスト教会ウェズリー派の宣教師ジョージ・ブラウンが1917年にシドニーで亡くなった時に、彼が遺族に残したものである。このコレクションのうち民族標本資料は3,000点を超す。しかし、彼が収集したもののすべてが、このコレクションに収められているわけではない。彼は、民族誌資料以外にも鳥類や昆虫といった動植物標本も多く集めていた。さらに、ブラウンが残した自伝や手紙、日誌などの記述からすると、彼が生前に収集した博物資料は相当の数にのぼると推察される。ブラウンが宣教師として活動していた19世紀後半から今世紀初頭の南太平洋は、探検や発見の対象から自然科学にとっての「自然の実験室」へと変貌する時期であった（MacLeod and Rehbock 1994：ix）。そしてこの時代には、キリスト教宣教師の活動は南太平洋のほぼ全域に及びつつあった。この小論では、ジョージ・ブラウンの博物収集を具体的な事例として、当時の英国から太平洋へ向かった宣教師と博物学の関係を素描してみたい。

2．19世紀のオセアニアにおける宣教師と博物収集

(1) 科学者の標本採集旅行

オセアニアにおいて大量の博物収集が最初になされたのは、ジェームズ・クックの3度にわたる航海の時であった。この航海は、当時の最新の科学技術を駆使した調査探検であり、オセアニアの数多くの動植物の標本や人びとの生活道具などがヨーロッパに持ち帰られて紹介された[1]。これらのオセアニアの資料や情報は各方面の分野に大きな反響を呼んだ。そして1795年に設立されたロンドン伝道協会（London Missionary Society、以下L.M.S.）の創設者たちは、出版されたクックの航海記録を読み、バウ

ンティ号事件のブライ船長に話を聞き、タヒチ島こそ福音を伝道すべき異教の地と考えた（Edmond 1997：98）。そして早くも設立の翌年に、30名からなる伝道団がタヒチ島に向けて出発していった。この島での伝道活動が軌道に乗るまでには幾多の困難もあったが、キリスト教に改宗したポマレ2世が1815年にタヒチ島を支配すると、教会堂の建立、ルカ伝のタヒチ語訳と伝道活動も順調に進み、タヒチ島は太平洋で最初の福音王国となった。そしてL.M.S.の伝道活動は、ソサエティ諸島の他の島々へも拡大していった。このように伝道活動が成功を収めた島々へは、1820年代から1830年代にかけて、ヨーロッパから海軍軍人や探検家などとともに、博物学者たちが訪れるようになった。政府の探検隊員としてやってくる学者以外にも、捕鯨船や真珠の採集船に便乗してやって来る博物学者や地質学者もいた。そして彼らのほとんど全員が、現地の宣教師に様々な情報や援助を頼っていたのである。

1820年代後半に南太平洋の島々で鳥類や植物それに貝類などを採集した英国人博物学者として、スタッチバーリSamuel StutchburyとカミングHugh Cumingがいる。二人ともダーウィンCharles Darwinに貴重なデータを提供し、彼の研究の発展に大きな貢献をした人物である。彼らが採集し、英国へ持ち帰った博物標本は、王立植物園（キュー・ガーデン）、ロンドンの動物学会やリンネ学会、地質学会にとっても重要な標本資料となり、とりわけ自然誌博物館と王立植物園は、彼らの採集標本から多くの恩恵を受けたと言われている[2)]。

スタッチバーリは1825年に「博物収集家」として真珠採集船に乗船し、南太平洋で多数の貝を採集した。彼はソサエティ諸島では、L.M.S.の宣教師バーフCharles Barffや『南海諸島の布教事業物語』（1837）の著者としても有名なジョン・ウィリアムズJohn Williamsなどと親密な関係を持ち、現地での通訳あるいは助手の手配といったことで彼ら宣教師の世話を受けていた。タヒチ島のマタヴァイ湾居住の宣教師ウィルソンCharles Wilsonも、スタッチバーリの採集調査に案内人の世話をし、後にビーグル号でやって来たダーウィンに対しても、山岳地帯へのガイドを引き受けている。

また、カミングは主にソサエティ諸島、オーストラル諸島、トゥアモトゥ諸島で貝類を中心とした採集調査を実施した。この時にも、フアヒネ島のバーフはカミングのために採集助手や潜水夫の手配や、自らも通訳の役割を果たした。タヒチ島マタヴァイ湾のウィルソンも潜水夫や案内人の世話をしている。

ダーウィンによるビーグル号での航海（1831-1836）から、彼の『種の起源』（1859）が出版されるまでの間に、太平洋を訪れた英国人博物学者にウィリアム・ハーヴィWilliam Henry Harveyがいる。彼は『海辺の本』（1848）を著し、科学を一般の人々にとって身近でわかりやすいものとしたが、彼自身は福音派の信者でもあった。1855年にオセアニアを訪れたハーヴィは、シドニーでは、博物学者でありオーストラリア博物館初代館長でもあったベネットGeorge Bennett（在職1835-1841）のもとにしばらく逗留していた。そして、彼はウェズリー派の船ジョン・ウェズリー号に乗り、トンガ諸島とフィジー諸島へ標本資料の採集旅行に出かけている。ハーヴィは南太平洋の島々でのウェズリー派の活動に感銘を受け、ポリネシア医療救援協会（Polynesian Medical Aid Society）を設立し、医薬品を提供できるようにした（Gunson 1994：294）。

(2) 宣教師による博物学・民族学研究

ダーウィンの進化論をめぐって、当時の自然科学者とキリスト教会の関係は対立の図式で描かれがちである。しかしダーウィンの考えに強い拒否反応を示したのは、英国国教会の中でも教会の権威や儀式を重んじる高教会派であり、赴任地で布教に携わっていた福音伝道派の人々は、むしろ当時の科学の最先端とともにあったと言える。そして『種の起源』の発表以降、宣教師たちの中には、自然科学者の研究を補佐するだけでなく、自ら博物学標本を採集したり、自然科学の分野における著作を発表する者も現れてくる[3]。

英国ケント州の州都メイドストンの教区主管代理職にあったブレンチェリーJulius Brenchleyは、1865年にトンガ諸島、フィジー諸島、ニューヘブリデス諸島、ニューカレドニア島、ソロモン諸島を訪れ、自然誌と民族誌の膨大な数の標本資料を収集している[4]。彼の収集活動はメラネシア宣教団（Melanesian Mission）のペイトソンJohn Coleridge Pattesonとコドリントン Robert Henry Codringtonに負うところが大きかった。

ペイトソンはメラネシア宣教団の主教であり、1840年代に比較言語学者のマックス・ミュラーMax Mullerとドイツで出会い、1850年代にオックスフォードで再会した後は、メラネシアの言語に関するデータをミュラーへ送っていた（Stocking 1995：38）。コドリントンはニュージーランドのオタゴの主教職を辞退して、ペイトソンに

同行していた。ブレンチェリーがペイトソンとコドリントンに出会ったとき、彼らは宣教団の船サザーンクロス号でメラネシアの島々の伝道所を見回っている途中であった（Gunson 1994：297）。

コドリントンも次第にメラネシアの言語に関心を抱くようになり、ペイトソンが1871年にサンタ・クルーズ諸島のヌカプ島で殉教した後も、ミュラーとの関係を維持し、さらに進化論的人類学とも関係を築いていった[5]。彼は、フィジー諸島の綿花農園の労働力として、ヌカプ島から誘拐同然に連れていかれた島民たちの様子を気遣い、フィジー諸島に赴任していたウェズリー派の宣教師ファイソンLorimer Fisonと1872年から手紙のやり取りを始めた。そして、ファイソンを介してタイラーEdward Tylorとの関係が築かれた[6]。コドリントン自身は、民族誌データ、特に宗教に関してのデータの採集の難しさを十分認識しており、それだけに当時の「肘掛け椅子の人類学者」の著作に対してはかなり批判的であり、懐疑的であった（Stocking 1995：40-42）。

その後も、オセアニアの島々で布教活動に従事していた宣教師たちは、ヨーロッパや北米から訪れる博物学者たちの調査に協力し、また書簡のやり取りによって多くの博物学的、民族学的、言語学的情報を提供したのである。しかしながら、これまで見てきたように、博物学者たちの標本採集調査が宣教師の協力に負うところが大きかったにもかかわらず、そのことが学者たちによって言明されることはあまりなかったため（Gunson 1994：311 note 65）、宣教師自身が書き残した日誌や手紙などが資料として残っている場合にのみ、彼らの具体的な協力の様子や、彼らがもっていた当時の博物学の知識などの一端を知ることができる[7]。

3．博物標本収集家としてのブラウン

(1) 自然誌標本の収集

ジョージ・ブラウンはファイソンと同じメソジスト教会ウェズリー派に所属し、生前に多数の民族誌標本や自然誌標本を収集した。国立民族学博物館が所蔵する民族誌標本は3,000点を越すが、このコレクションだけが彼の収集した標本資料のすべてではない。オーストラリアのタスマニア博物館やオーストラリア博物館も、ブラウンの収集による標本資料を所蔵している。また、彼が収集した自然誌標本は、英国のニューキャスル大学ハンコック博物館をはじめとする複数の博物館に保管されている。ブラウンは自伝の中で、彼の博物採集について若干触れてはいるが、より詳細な活動や人

間関係などについては、彼が残した日誌や手紙からのみ伺い知ることができる。また、現在はシドニーのオーストラリア博物館が所蔵しているブラウン撮影の900点を超すガラス乾板も、彼の活動を知る重要な資料である。以下では、ブラウンがどのように民族誌標本に興味を抱き、そしてどのような収集を行っていたのかを、サモア諸島とビスマーク諸島での宣教活動時代を例に見てみることにする。

ブラウンがサモア諸島滞在中におこなった民族誌標本の収集は、当初は布教活動のための資金調達を幾分かでも助ける目的でなされたものであった。彼はシドニーのレイボン師Rev. Raboneへの手紙で次のように書いている。

「我々がこちらで集めるよりも多くの金銭を、あなたがこれらの器物を売ることで得られるのではないかと思います。多くの棍棒や槍、釣り針それに樹皮布を手に入れました。我々の生活物資を運んできた船でそちらへ送ることにします。」（Brown to Rabone, 13 July 1866）

すでに英国植民地の器物は、英国本国やオーストラリア、ニュージーランドで高い人気を得ており、宣教師たちも「異教徒」の存在とキリスト教の勝利を表象するものとして（Thomas 1991：153-156）、住民たちの器物を収集しただけでなく、布教活動の資金調達のため、さらには家族や友人・知人への贈り物として、あるいは自分のコレクションの充実のために収集していたのである。レイボンへの別の手紙では、「あなたへの団扇を少し入手しましたので、ウェズリー号で送ります」（Brown to Rabone, 10 Dec 1869）とあり、同じ宣教師である同僚へも送っていたことがわかる。

しかし、当時のブラウン自身は民族誌標本にそれほど強い関心があったわけではなく、むしろ彼の博物学的関心はサモア諸島の鳥類、とりわけオオハシバトdidunculus strigirostrisにあった。この鳥が初めて記録されたのは1839年で、その異様な外見、限られた生息地、原産地が謎であることなどが紹介されたとき、鳥類学者たちの注目を集めた[6]。1862年、英国王立動物学協会は、この鳥を生きたまま捕獲することを求める広告を出したほどである。1863年、ブラウンはトゥフ地方の首長ラヴェラヴェLave Laveから生きた一羽を譲り受け、それをシドニー経由でロンドンへ送ろうとした。偶然にもサモアの英国領事ウィリアムズJ.C.Williamsがシドニーまでの船上でこの鳥を

目にし、彼はシドニー到着後、この鳥をベネットBennett[9]に渡してしまった。そして、ベネットはこの貴重なオオハシバトをロンドン動物学協会へと送ってしまったのである。もちろん、ブラウンの許可もなければ、彼の名前が言及されることもなかった（Fletcher 1944：108-110）。

その後も、ブラウンはサモア諸島で博物学標本を数多く採集し、ニュージーランドやオーストラリアの博物館や知人に送っている（Brown to Day, 15 Nov 1871；Brown to Firth, 30 Aug 1870, 20 July 1871, 10 Nov 1871）。ブラウンがいかに自然誌標本の採集に熱心であったかは、ダンクスBenjamin Danksがクラインシュミットから聞いた話として紹介されている。ダンクスは、ブラウンの後継者としてビスマーク諸島で布教にあたった宣教師である。クラインシュミットは、ハンブルクのゴデフロイ博物館から委託を受けて、サモア諸島で標本採集をしており、その意味ではブラウンとはライバルでもあった。

「シドニーやクックタウン、それに他のところでも、我々の宣教団の評判はよくない。我々が交易を行い、もっとも価値のある珍品を手に入れるために信徒を利用している、と思われている。彼（クラインシュミット）は、ブラウン師はニューブリテン島民の魂よりも、新種の蛇や鳥、昆虫に自分の名前を付けることに関心を抱いている、のは確かだという。ブラウン師は博物学者のために新天地を切り開いただけでなく、重要な発見も数多くした。そのために師は羨まれたのである」（Deane 1933：76）

サモア諸島での14年間の伝道活動を終えてシドニーへ帰る途中、ブラウンはフィジー諸島で英国王立科学協会（the Royal Society）が選抜した学者たちの調査隊と出会う。一行を率いていたのは、エディンバラ大学博物学教授のトンプソンWyville Thomsonであった。トンプソンはブラウンと長時間にわたり情報交換をし、ブラウンがサモア諸島で採集した自然誌標本の一部を譲り受けている（Brown Journal, 31 July 1874）。この経験によってブラウンは、さらに研究心をあおられたものと思われる。しかしながら、トンプソンは調査報告書の中でこれらの標本の出所を明らかにすることはなかった（Fletcher 1944：106-107）。トンプソンへ自然誌の情報を与え、標本の一部を譲ったことを、もしブラウンが日誌の中に記録していなかったなら、他の多くの宣教師による学者への協力と同様に、この協力関係は永遠に知られないままであった

可能性は高い。

(2)「珍品」への関心；サモア諸島からビスマーク諸島へ

サモア諸島での布教活動に従事した後、ブラウンはニューブリテン島とニューアイルランド島での布教活動を開始するための募金目的で、1874年にオーストラリア南東部とニュージーランドの諸都市をまわる講演の旅をおこなっている。彼はこの時、訪れた土地の博物館や図書館、そして植物園を精力的に訪ねて関係者に会っている。メルボルンではヴィクトリア植物園の前園長で、政府おかかえの植物学者ミュラーFerdinand von Muellerに面会している（Brown Journal, 27 October 1874, 28 October 1874, 29 October 1874)[10]。オーストラリア博物館の最初のオーストラリア人館長となったラムゼイEdward Ramsay（在職1874-1894）とも、この時に会っていたかどうかは定かではないが、ラムゼイも鳥類学者であり、当時すでにブラウンと交流があった可能性は高い（Strahan et al 1979：37-38）。また、1874年12月、ブラウンは太平洋地域を旅行していた若きヒューゲル（Anatole von Hugel)[11]と、メルボルンからニュージーランド南島の南端にある港町ブラッフまで同行している。ブラウンがニューブリテン島とニューアイルランド島での布教のための要員を募る目的で、1875年4月27日にフィジーに向けてシドニーを出航したジョン・ウェズリー号には、ヒューゲルと彼の2人の助手も乗船した（Brown 1978：71)[12]。当時のフィジー諸島は、彼らが到着する7カ月前に、英国に割譲されたばかりであった。

ヒューゲルはブラウン同様に鳥類標本を収集していたため、その点でお互い意気統合したのかもしれない。しかしヒューゲルは、自然誌と民族誌標本の収集家でもあった父親の影響もあり、彼自身も民族誌標本の収集に情熱を傾けていた。そして彼の収集方法は、当時の宣教師や入植者たちが単に「未開」や「野蛮」を表象する「珍品（curios）」として民族誌標本を収集していたのとは大きく異なっていた。彼は収集品の現地名、材料、交易品としての重要性なども入念に記録したのである。当時のフィジー諸島の入植者たちの中にも、現地の物質文化に興味を持ち、住まいの居間に数点のコレクションを飾っている者もいたが、彼らのほとんどの収集品は武器や「食人用フォーク」など、いかにも「Cannibal Feeje」を表象するものであった[13]。それに対してヒューゲルは、日用品や装飾品、武器など生活の様々な場面で使用されていたものを、広範囲にわたって収集することに努めていた（Thomas 1991：164-170）。ヒューゲル

はまた、ラボックJ. Lubbockやタイラーが最新の研究の中で、言語学や民族学のデータを物質文化と関連させて、有史以前の人類の生活を論じていたことも詳しく知っていた[14]。

フィジー諸島到着後、ブラウンはニューブリテン島とニューアイルランド島での布教活動のための要員を募ることに奔走していたが、それでもヒューゲルを近隣の島を訪ねる小旅行に誘っている（Brown to von Fugel, 7 June 1875）。フィジーにおいて2人の収集目的の旅が実現したかどうかは不明であるが、ブラウンとヒューゲルはメルボルンからブラッフまでの旅行と、シドニーからフィジー諸島までの船上で、自然誌に関してだけでなく、民族誌や民族誌標本についても情報を交換する十分の時間を持てたはずである。

しかしながら、フューゲルと宣教師たちの関係は、フィジー滞在中に次第に崩れていったようである。ブラウンは妻への手紙の中で「（ヒューゲル）一行が我々に同行しないことを願っている。彼（ヒューゲル）はファイソン氏と口論となった。我々にとって彼は苦労の種となるのではないかと心配している」（G. Brown to L. Brown, 24 May 1875）と書き、さらにその3週間後には「ヒューゲル男爵は好きになれない。彼はつまらない男であり、嫌な性格の持ち主である」（G. Brown to L. Brown, 13 June 1875）とまで書きしるしている。

ブラウンが9名のフィジー人宣教師を伴って、サモア経由でニューブリテン島へ向けて出発する前日、ヒューゲルは体調が思わしくないため、フィジー諸島に留まることをブラウンに伝えた（Brown to Chapman, 14 June 1875）。しかしヒューゲルの鳥類標本の採集を担当していた助手クッカエルCockerellと写真家ウォルターCharles Walterは、翌日、ウェズリー号に乗船し、フィジー諸島を後にした。新たな赴任地での布教活動の忙しさを思ってか、ブラウンはクッカエルが鳥類標本の製作を手伝ってくれることと、ウォルターから写真技術を学べることを喜んでいた（Brown to Buddle, 30 June 1875）[15]。

(3) 関係性の中の器物；ビスマーク諸島での収集

一行はサモア諸島を経由して、1875年8月に新たな伝道基地となるデューク・オブ・ヨーク諸島のポート・ハンターに到着する。ジョン・ウェズリー号がシドニーに向けて出航するまでの3週間の間、ブラウンは博物標本の採集を精力的におこなった。ロン

ドンの王立動物学協会の事務局長スクレイターSclater宛にこれまでの航海で集めたオオハシバト3羽、オウム2羽、大型のオウム1羽、鳩2羽、それにヒクイドリ2羽を船に積み込み（Brown to Sclater, 5 September 1875）、オーストラリア博物館館長ラムゼイ宛には、荷箱1個分の植物標本を送っている（Brown to Ramsay, 3 September 1875）。

ブラウンの最初の1カ月は、ほとんど島民との物々交換に充てられたと言っても過言ではない。

「我々がほしいものであるか否かに関わらず、住民たちが持ってきたすべてのものを買い取った。ただ鼈甲だけは例外であった。・・・・・我々が交易目的でここにいるのではないということを、住民にもそして交易商人にもわかってもらいたかったからである・・・・・物々交換が終了すると、何とか人びとを静かにさせ、私は通訳をとおして我々の目的は何であるかを説明した」（Brown 1908：118）

初めて会った住民との関係を築くために、先ず物々交換をして警戒心を取り除くというのは、ブラウンに限らず当時の宣教師たちがとった手続きであった。そしてこの方法は、18世紀の探検家たちから引き継いだものであり、宣教師だけでなく植民者や船員たちも、そして行政官でさえも従った一種の「儀式」である。そこでは、何を交換するかが問題ではなく、交換をするか否かが問題なのであった。ブラウンがこうした物々交換に使用していたのは、ビーズや針、手斧、ナイフ、布地などである。

そして同じ頃、ブラウンは自分のコレクションの対象として、ビスマーク諸島での民族誌標本の収集を開始したと思われる。オークランドに住む妻に宛てて「槍と棍棒一束と雑貨」の入った荷箱を送り、そのうちのフィジー諸島の棍棒2本と、束になっている棍棒と槍の中から最良のもの4，5本は残しておくようにと手紙で指示している（G. Brown to L. Brown, 22 August 1875）。しかし彼の布教地での生活を見ると、現地の島民の社会関係に次第に入り込んでいくプロセスの中で、ビーズをはじめとする物資を取引に用いたり、逆に島民から様々な器物を受け取っている。たとえば、1876年2月、ブラウンは2つの村落間の争いを調停するために、死者が出た村に対して手斧、布地、ビーズ、タバコそれにナイフを渡した（Brown Journal, 17 February 1876）。また、ある時には、伝道所から手斧を盗んだ男の村へ行き、ブラウンはそこの長老に

タバコ3本と布地を渡した。するとその長老は盗まれた手斧に対して20個の貝貨をブラウンに手渡した。ただし長老は、後で盗人から20個以上の貝貨を後で受け取ることになっていた（Brown 1908：184）。

また、ブラウンがニューアイルランド島を初めて訪れたとき、一行は海岸で武装した男たちと遭遇する。その時、ブラウンは男たちの中に静かに歩いて入り、彼らが手にしていた槍やその他のものを物々交換した。こうして入手した槍のほとんどの先端部には、人間の足あるいは腕の骨が付いており、通訳に尋ねると、これらの骨は沿岸部の住民と内陸部の住民の戦争の結果、食人がおこなわれ、残った骨を槍の穂先に使用していることが解った。この時に集めた槍はポート・ハンターへ帰る船から海中に落として紛失してしまう（Brown 1908：125； Brown Journal, 27 October 1875）。しかし、彼はその後に骨を先端部に付けた槍を数多く収集しており、国立民族学博物館が所蔵するコレクションにもこの種の槍が42本含まれている[16]。

標本資料を収集し博物館などに寄贈する以外にも、博物館からの依頼を受けて収集することもあった。1879年から1880年にかけて開催されたシドニー博覧会には、シドニー博物館からの標本資料が展示されていた。博覧会は1880年4月に閉幕していたが、博物館の民族誌標本とと工業技術に関する資料は、会場となったガーデン・パレスに保管したままであった。1882年9月22日の夜、ガーデン・パレスは全焼し、約2,000点の標本資料もすべて灰となってしまった。館長のラムゼイは、民族標本資料の購入のため829ポンドを翌年に使用した。この時、収集を依頼された一人にブラウンがいた。彼は、ニューアイルランド島の石灰石像、ニューブリテン島の槍40本、ニューアイルランド島の槍100本を収集し、オーストラリア博物館へ送っている。

これまで見てきたのは、ジョージ・ブラウンがサモア諸島とビスマーク諸島で活躍していた頃、すなわち彼の宣教師としての長い経歴の中の初期の時代に焦点を絞った。それは、博物収集家としての彼の経歴においても、ほんの一部を見たにすぎない。ブラウンはビスマーク諸島での任務を終え、1881年にシドニーへ戻る。アメリカ合衆国と英国の各地を講演して回り、1887年にシドニーへ帰ると、メソジスト伝道協会の事務局長という要職に就いた。その後は、ニューギニアやソロモン諸島で新たに布教を開始するための調査にも出かけている。そうした機会にも、数多くの自然誌と民族誌の標本を収集していた。しかし、長期間にわたって宣教師として滞在したのは、ここで取り上げたサモア諸島とビスマーク諸島である。

4．ブラウンと民族学

当時の博物館のキュレーターや民族学者は、コレクションの欠落部分を補うことを、そして理論を構築するための実証的資料としての民族誌標本資料の入手か少なくともその情報を探し求めていた。すでに述べたように、19世紀の後半には、多くの自然科学者が南太平洋や他の地域で収集調査を実施するようになっていた。しかし民族学者は、そうした自然科学者よりも、長期間にわたって滞在し、現地語を習得した宣教師により強い信頼を置いていた（Stocking 1987：79）。

ビスマーク諸島到着後まもなく、ブラウンはオーストラリア博物館のラムゼイ宛てに植物標本を送ったことはすでに述べたが、彼自身、王立タスマニア科学協会、王立イングランド地理学会、オーストラリア科学振興協会の会員となって[17]、自然誌標本や民族誌標本を、それぞれの機関や親交のあった会員へ贈っていた。また、オークランド博物館キュレーターのチーズマンCheesemanへは、人間の頭骨の前面部に粘土と樹脂を塗りつけて作ってあるニューブリテン島の仮面を贈っている（Brown to Cheeseman, 9 September 1878）。同様の仮面は王立タスマニア科学協会に対しても5を寄贈している（Certificate from Royal Society of Tasmania, dated 26 May 1879）。

ブラウンは後期ヴィクトリア時代の英国民族学の中心人物であるタイラーへも、自分が収集した民族誌標本資料を送り届けている。ニューブリテン島のタムブと呼ばれる貝貨を受け取ったタイラーは、感謝の手紙の中で、島民がマレー人との交易から貨幣を学んだという証拠がないかを問い合わせている（Tylor to Brown, 23 September 1881）。また、別の手紙では結び目で月日などを記録する紐の有無を質問している（Tylor to Brown, 3 December 1886）。

タイラーは1883年にオックスフォード大学博物館のキーパーとなり、その翌年からは人類学の講師となっていた。このころすでに、フィジー諸島の宣教師ファイソンとソロモン諸島で伝道に携わっていたコドリントンは、タイラーと書簡を交換して民族誌データ収集の役割を担っていた。また、コドリントンは1883年に英国へ一時帰国した際に、オックスフォードでタイラーの講義を聴講している。ブラウンは1879年にビスマーク諸島でラボックの『文明の起源と人間の根源的状態』（1870）を読んでおり（Brown to Pratt, 4 April 1879）、またファイソンとホウィトによるオースト

ラリアのアボリジニに関する研究『カミラロイとクルナイ』（1880）も、ファイソンが同じウェズリー派の宣教師である以上、ブラウンにとっては読まずにはいられないものであったと思う。このように1880年前後より、ブラウンの民族学・人類学への関心は、物質文化以外の領域へも急速に拡大していったようである。そして、1887年にメソジスト伝道協会の事務局長に就任してからも、タイラーとの通信をはじめ、英国科学振興協会への出席（1888年）、フローレンス博物館のキュレーターであるギゴリHenry Giglioliとの交流（Gigholi to Brown, 4 December 1885；19 November 1886；1 March 1895；24 July 1896 など）と、教会の要職にありながらも人類学、博物学において活発な活動を続けていた。

ジョージ・ブラウン（1835-1917）とエドワード・タイラー（1833-1917）はまさに同時代を生き、一方は民族誌データの収集という一端に位置し、他方はその集積と理論化というもう一方の端に位置していた。当時の民族学・人類学の構造から見れば、タイラーは学問のまさに中心に位置し、世界中に張り巡らしたネットワークの末端から民族誌データが彼のもとに送られてくるシステムであった。しかし「肘掛け椅子」とフィールドを結びつけるには、調査手引きNotes and Queriesに従ってデータを収集させ、後に手紙のやり取りで補足をするだけでは決して十分とは言えなかった。現地に長期間滞在し、現地語を習得した宣教師たちは、行政官や短期間訪れて採集調査を実施する学者たちよりも、人類学者のもとに送る民族誌データに関して高い信頼が置かれていた。しかし彼らが「未開の迷信」を根絶することを使命としていたことは、データがゆがめられる大きな可能性を常に含んでいたことになる。

19世紀末を迎えた英国人類学では、学者みずからがデータ収集を行う「フィールドワーク」を研究に取り入れるようになる。先ず登場したのは、現地調査が研究方法としてすでに確立していた自然科学の分野から人類学者への転身である。1888年から1898年にかけて2度にわたりトレス海峡の調査探検を組織したハッドンAlfred Cort Haddonは、珊瑚礁の構造と形成過程そして植生の調査を目的としていた。しかし彼はマブアイ島で、民族誌調査を緊急に実施しないと、データが永遠に失われてしまうとの危機感を抱き、珊瑚礁の調査の傍ら、民族誌の調査もおこなった。生物の地理的分布に興味があった彼は、民族学においては、収集した物質文化の出所と伝播について研究したのである。

ハッドンは、その後も「フィールドワーク」の重要性を強く主張し続けたが[18]、英

国の人類学において、限定した地域での集中的な「フィールドワーク」に基づいた人類学者の育成に実際に貢献したのは、やはりトレス海峡の調査探検に参加したセリグマンとリヴァースであった。調査を実施する前に学問としての人類学のトレーニングを受け、最初に「フィールドワーク」をおこなったのはラドクリフ= ブラウンRadcliffe-Brownであった。彼は、ケンブリッジ大学のリヴァースとハッドンのもとで学び、1905年にアンダマン諸島へ出発した。また、ロンドン経済学院のセリグマンに指導を受けたウィーラーGerald C. Wheelerは、西ソロモン諸島で10カ月間の調査を実施し、オックスフォード大学のホカートは、フィジー諸島で校長を務めながら、4年間にわたって詳細なデータを収集した。このほかにもニューギニアのキーワイ島で調査をしたラントマンGunnar Landtmanなど少なくとも10名のフィールドワーク人類学の第一世代が誕生している（Stocking 1995：117-119）。「肘掛け椅子」からやっと重い腰を上げた人類学が、「フィールドワーク」の先駆者である宣教師たちの手を経ないで、直接的に民族誌データを収集するようになったのである。

5．コレクションの来歴

世界各地の博物館が所蔵する古い民族誌標本資料コレクションは、収集者の手から直接に博物館へ寄贈もしくは販売がなされたケースはほとんどなく、その歴史は複雑である。こうしたコレクションは多くの手を経て、時には分散され、一部が売却され、重要な記録を紛失したりして博物館に入ってくる（たとえば、Kaeppler 1978；Nason 1987；Raynold 1986）。

ジョージ・ブラウンは1917年4月7日の夜10時過ぎ、シドニー郊外のゴードンで82歳の生涯を閉じた。4月10日にゴードンのメソジスト教会で追悼の礼拝がおこなわれた後、彼の遺体はゴア・ヒル墓地に埋葬された。彼の家には、宣教師として活躍していた頃に南太平洋の島々で集めた3,000点を超える民族誌標本資料が保管されており、あたかも博物館のようであったという（シドニー・モーニング・ヘラルド紙、1917年4月9日）。これが今日、ジョージ・ブラウン・コレクションと呼ばれているものである。翌年、遺族はシドニーのオーストラリア博物館に対し、このコレクション購入の打診をした。ただし、ジョージ・ブラウン・コレクションとしてまとめて展示をおこなうことと、展示後も一括して保管することを条件とした。それに対して、オーストラリア博物館は、コレクションすべてではなく、その一部だけの購入を申し入れた

が、遺族はジョージ・ブラウンの名声を残すものとして、分散させることなく一つのコレクションとして売却し、博物館に展示・収蔵されることを強く望んだ。結局、この交渉はものわかれに終わった。オーストラリア博物館は、ブラウンの生前に彼から民族誌標本の寄贈を受けたり、購入もしていた。

1921年、ブラウン財団はコレクションを、ブラウンの生まれ故郷であるイングランドのバーナード・キャスルにあるボウズ博物館へ売却した。しかし、ボウズ博物館では、一括して展示するスペースがなく、結果的にコレクションの一部だけしか展示されなかった。1954年、財政上の理由からボウズ博物館は、このコレクションをニューキャスルのキングズ・カレッジ（現在のニューキャスル大学）へ転売することになった。この時キングズ・カレッジでは、コレクションをバーナード・キャスルからニューキャスルに移すにあたって、人類学の教育のために活用することを強調して購入した。1974年には、ニューキャスル大学のハンコック博物館が、コレクションの管理責任を負うこととなった。しかし、この博物館でもコレクションのすべてが展示されることはついになかった。

やがて、ニューキャスル大学はこのジョージ・ブラウン・コレクションを保管する場所に悩むようになり、同時に大学の運営資金確保の必要に迫られ、コレクションを売却することを決断した。これに対しては学内においても強い反対が起こった。1985年、オーストラリア博物館は売りに出されたコレクションの購入に関心を示した。スペクトによると、それは、ヴァヌアツの国立文化センターのキュレーターによって、コレクションが売りに出されていることを知ったためであった。このコレクションの収集地である太平洋諸国の博物館や政府には、即座にコレクションを購入することなど不可能であり、オーストラリア博物館ですら、コレクション購入のための資金を調達することの難しさは十分認識していた。しかし、同博物館は1930年代初頭に、ジョージ・ブラウンがみずから撮影した約900点におよぶガラス乾板を購入しており、そのため民族誌標本資料のコレクションの購入がきわめて重要なことと感じていたのであった。もしオーストラリア博物館がコレクションを購入することができたならば、交渉次第でそれらコレクションを収集国へ返還することも検討される可能性もあった（Specht 1987：1）。

すでに述べたように、ブラウンが亡くなった時、彼の遺族はコレクションを分散させることなく、一つの機関が展示と保管を行うことを希望した。3,000点を越えるコ

レクションのすべてを一同に展示することは、ボウズ博物館でもハンコック博物館でもかなわなかったが、ニューキャッスル大学がコレクションをサザビーを通じて売りに出すまでは、一括した保管がなされてきたわけである。しかし今回の売却は、結果的にブラウン・コレクションを分散させることとなってしまった。その背景には、民族誌標本資料が「原始芸術」や「未開芸術」として人気を博すようになっており、太平洋地域からのものの中ではとりわけ、ニューアイルランドのマランガンと総称される木彫が、高価な値で売買されるようになっていた事実があった。

1986年、コレクションは大阪の国立民族学博物館に買い取られることとなった。しかしこの売却に対して、英国国内の多くの人類学者や博物館関係者は反対の立場に立った。宣教師ジョージ・ブラウンが収集したものは、太平洋における大英帝国の繁栄を象徴したものと捉えられたのである（Rubel and Rosman 1996：66-67）。16,000ポンド以上の評価額が与えられた民族誌標本資料を英国国外へ持ち出すには、政府の輸出許可が必要ということとなった。ブラウン・コレクションの中の19点が16,000ポンド以上の価値があるものと評価され、輸出許可がおりなかった。それらの19点の資料は、英国国内の博物館へ売却されることとなった。結果的には、イースト・アングリア大学セインズバリー・センターが彫像3点と仮面3点、バーミンガム市立博物館が仮面1点、大英博物館が彫像2点と仮面2点を購入することとなり、他のものはすべて国立民族学博物館への売却が決まった。

すでに指摘したように、ブラウン・コレクションは分散されるべきではない、との主張が繰り返しなされてきた。ニューキャッスル大学がコレクションを手放すことを決定した時も、分割することなく、一つのコレクションとして一括して売却しようとしたのであった。その結果、太平洋の新興諸国家にとっては、とうてい手の届かぬ販売価格となってしまったのである。

このコレクションは、ブラウンが亡くなった時に、彼のもとにあった民族誌資料である。しかし、ブラウンが生前に収集した民族誌資料がこれだけであったわけではない。彼は数多くの民族誌資料を収集し、時には博物館に寄贈したり売却したり、あるいは知人に譲ったりしていたのである。国立民族学博物館と英国の3機関に分散したコレクションは、規模としては最も大きなものであるが、ブラウンが収集したものの一部なのである。

6．コレクションの現在

国立民族学博物館は1994年より国際協力事業団と協力し、アジア、オセアニア、アフリカ、中南米、東欧などからの博物館学研修コースへの参加者を、毎年10名前後受け入れてきている。オセアニアからは、この研修コースへこれまで4名が参加している。パプアニューギニアとソロモン諸島の、それぞれの国立博物館に勤務する若手の学芸員たちである。彼らには研修の合間をぬって、国立民族学博物館が所蔵する写真などの映像資料や、標本資料に関しての情報の補充に協力してもらってきた。

すでに述べたように、19世紀後半の民族学・人類学では、物質文化あるいは民族誌標本の研究とは器物の形態と機能の比較研究を意味していた。ヒューゲルが、民族誌標本の科学的研究には詳細な情報の収集が不可欠であると主張したにもかかわらず、ブラウンが残した民族誌標本コレクションのほとんどには、現地名、材質、用途などに関する情報が欠落している。収集地でさえ、非常に大まかな地名だけしか記録されていない。ボウズ博物館とハンコック博物館では、こうしたデータの欠落を補う調査がおこなわれてきたが、十分なデータの集積が完了したと呼ぶにはほど遠い。そして現在は、国立民族学博物館のオセアニア研究者を中心として、ブラウンが訪れた島々でのフィールドワークや、他の博物館のコレクション研究などを通じて、さらなるデータの充実を目指している。言うまでもなく、博物館研修コースへのオセアニア参加者からの情報は、とりわけ重要なものとなっている。

ジョージ・ブラウン・コレクションは、かつて大英帝国としてオセアニアにおいても威光を放っていた英国から、ユーラシア大陸を越えて、太平洋に面した東アジアの日本へ移ってきた。国立民族学博物館がコレクションを購入した時、11点が英国内の機関へ売却されることがすでに決定されていた。また、ブラウンが収集した民族誌標本資料は、オーストラリアやニュージーランドの博物館にも収蔵されている。それでもジョージ・ブラウン・コレクションと言うときには、国立民族学博物館が所蔵するコレクションを指している。それは、ジョージ・ブラウンというメソジスト教会の宣教師が、南太平洋の島々で収集した標本資料の最大数のまとまりをもっているからである。しかし忘れてはならないことは、これらの標本資料が収集された南太平洋の国々にとっての関心は、コレクションという一つのまとまりではなく、その中にそれぞれの国の物質文化が存在するという事実である。そして、一つのコレクションとしての一括売却が主張されたとき、南太平洋の国々に対しては購入の打診さえされなかった

という事実である（Specht 1993：275）。今、コレクションを所蔵する責任を改めて強く感じると同時に、文化遺産の名のもとに価値観の偏重がなされる危険性を強く認識している。

謝　辞

シドニーのミッチェル図書館ではキュレーターのアラン・デイヴィス氏に、19世紀末から今世紀初頭にかけての写真コレクション、新聞・雑誌、そしてジョージ・ブラウンの日誌や手紙の閲覧で便宜をはかっていただいた。ミッチェル図書館での調査は、トヨタ財団研究助成「メラネシアの近代史と異文化像の形成」（助成番号96-A-214）により実施した。

注

1）クック一行が収集した民族誌標本資料に関しては、Gathercole and Clarke（1979）、林（1999）、Kaeppler（1978, 1979）、Pearce（1973）、Smith（1985）、Thomas（1994）などを参照されたい。

2）スタッチバーリとカミングについては、Garber（1994）とGunson（1994）を参照。カミングは、28歳の時にイングランドのデヴォン州を離れ、南米チリ中部の港町バルパライソへ行き、縫帆手として働きながら博物学の勉強をしていた。35歳でその仕事を辞め、1827年に東ポリネシアの島々で12カ月にわたる博物学調査を開始した。ダーウィンは1839年に帰国してまもないカミングに会い、自分がガラパゴス諸島で採集した貝の半数が同諸島固有のものであり、他の貝にはアメリカ大陸西海岸のものと太平洋中央地域のものがあり、ガラパゴス諸島だけが後者二つの地域の貝を採集できるところであることを知って、ガラパゴス諸島が「進化の実験室」であることを確信したと言われている（Garber 1994：174）。カミングが収集した標本の多くを個人収集家へも売っていたように（Gunson 1994：291）、学者や博物館以外にも、当時の博物採集家たちには個人収集家という顧客がいた。

3）19世紀前半にもL.M.S.の宣教師であるウィリアム・エリスWilliam Ellisの『ポリネシア研究』（1829）やジョン・ウィリアムズの『南海諸島の布教事業物語』（1837）など、当時のポリネシア文化を知るための重要な書物が出版されていた。しかしこれらの著作は、撲滅すべき異教の文化に対する偏見が強く、特にウィリアムズの著作は、伝道活動を支持する本国の読者を対象とし、太平洋での伝道活動を強くアピールする事を目的として書かれた

ものであった。また、ウィリアムズは数多くの「偶像」や武器、生活用具を収集し、それらをロンドンの本部へと送り届けた（Edmond 1997：114）。ロンドン伝道協会とウェズリー派伝道協会は独自の博物館をロンドンに持ち、伝道地から送られてきた品々を異教の存在の証として、また「偶像」崇拝を放棄させた成果として展示していた（Coombes 1994： 168）。

4） ブレンチェリーは、ソロモン諸島だけでも1,000点を超す民族標本資料を集めている。これらの資料は、現在は大英博物館とメイドストン博物館に収められている（Gathercole and Clarke 1979）。

5） コドリントンは、オックスフォードのある教会で牧師補佐をしていたが、同教会の牧師がニュージーランド、クライストチャーチの主教に任命されると、自分の昇進の機会を捨てて彼と共にニュージーランドへ渡った。そこでもオタゴの主教の職を辞退して、ペイトソン主教がメラネシアの島々の伝道基地を訪問するのに同行した。いったんイギリスへ帰国するが、メラネシア伝道団に入り、ペイトソンの片腕として働く。1871年に、ペイトソンがサンタクルーズ諸島のヌカプ島で住民に殺害されてしまった後は、ペイトソンが残した言語データに基づきながら、メラネシア言語の研究を深化させていった。コドリントンとタイラーとの関係は、1881年に彼の言語と民族誌データをファイソンがタイラーへ送ってから始まった。コドリントンは、1883年に自分の言語データを研究するためにイギリスへ帰国したとき、オックスフォードでのタイラーの講義に出席している。ウェズリー派宣教師ファイソンとは会派の違いはあったものの、両者の関係は1890年まで続いた。コドリントンの人類学への貢献については（Stocking 1995 34-46）を参照。また、コドリントン収集による民族誌資料はオックスフォードのピット・リバース博物館に収蔵されている（Gathercole and Clarke 1979）。

6） ファイソンは1863年に妻を伴ってフィジー諸島に赴任したが、1871年から4年間はオーストラリアに住んでいた。モルガンの要請で、オーストラリア先住民の親族組織について調べ始めたのを契機として、クラスとトーテムによる分類に関する集中的な調査を実施した。その成果は後にホウィットAlfred W. Howittとの共著『カミラロイとクルナイ』（1880）として発表された。彼らの研究の歴史的意義については、Kuper （1988）、Stocking（1987, 1995）などに詳しい。

7） 近年になって、19世紀に太平洋の島々でキリスト教の伝統活動に従事した宣教師たちが残した日誌、手紙、写真などが伝記的価値を越えて、博物学史や人類学史の研究のために貴重な資料であることが認識され始めた。特に、George Stockingが19世紀から今世紀前半

にかけての欧米人類学史に関する研究の中で、宣教師の果たした人類学への貢献について論じていることは重要である。また、メラネシアで活躍した宣教師に関する研究では、Langmoreによる James Chalmersの研究（1974）とパプア地域で布教に従事した宣教師たちの研究（1989）などが注目される。

8） オレンジ色の大きな鉤状の嘴をもつ鳩で、生息地はサモア諸島のサヴァイイ島とウポル島に限られている。1839年にサモア諸島を訪れたアメリカ合衆国の探検調査隊によって発見されて以来、鳥類学者たちの興味を掻き立ててきた。近い別の種の鳥も確認されておらず、絶滅したドードーに近い種であるとの説もある。それにもかかわらず、このオオハシバトの研究はほとんど行われていない（Watling 1982：83-84）。

9） このベネットは、おそらくオーストラリア博物館の初代館長George Bennettであると思われる。彼は1853年から1874年まで同博物館の理事を務めていた。その間、1863, 1866, 1873年には理事長職に就いている（Strahan et al 1979：27, 161）。彼は多くの博物学論文を発表し、『ニューサウスウェールズ漫遊記』（1834）や『南洋州の博物学者の収集品』（1860）などの著書もある。

10） ミュラーのもとには、特にニューギニアに赴任したロンドン伝道協会の宣教師から多数の植物標本が送られてきた（Gunson 1994： 298）。

11） ヒューゲルは後にフィジーの民族誌標本の収集家として知られ、ケンブリッジ大学の考古・人類学博物館のキュレーターとなる。

12） 同じ船にはファイソンも乗船していた（Brown 1908：71）。彼は4年間のオーストラリア滞在を終えてフィジー諸島へ帰る途中であった。

13） フィジー人の食人習慣は、白檀やナマコを求めてやってきた船員や捕鯨船の乗組員たちによって、19世紀前半にはすでに英国にも知らされていた（橋本 1996：51）。また、ウェズリー派の宣教師トーマス・ウィリアムズThomas Williamsは、1835年から1853年までのフィジー諸島での生活をもとに『フィジーとフィジー人』（1858）を著し、その中で、人間の堕落した姿としてフィジー人の「食人」「妻の伴死」「戦争」を記述している。

14） ラボックの『文明の起源と人類の未開的状態』は1870年に、タイラーの『原始文化』は1871年に出版されていた。

15） ブラウンは、デューク・オブ・ヨーク諸島に到着してから、妻への手紙の中で次のように書いている。「ウォルター氏の写真機材一式を買い取った。必要な修理を施した後で、練習するつもりだ」（8 September 1875）。ブラウンがウォルターから写真機材を入手した

経緯については、ずっと後になってからブラウンが講演の中で触れている。それによると、ニューブリテン島のブランシュ湾に船を停泊させ、食料を得るために上陸した。ある村を訪れていたとき、村落間の争いが始まってしまった。ブラウンたちに槍や石が飛んでくることはなかったが、ウォルターは恐怖心から再び島に戻って写真撮影をすることができなかった。ブラウンも絶対安全との保証のもとに、ウォルターを説得することができず、写真機を彼から買い取ることにした（Webb 1995：60）。

16） 人間の脚もしくは腕の骨を付けた槍は、食人習慣の存在の証明であるとの記述は、日誌の他の箇所でも繰り返されている（Brown Journal, 3 December 1875）。しかし、本書所収の野林論文によると、これらの骨の中には人骨だけでなくヒクイドリなどの大型の走鳥やカンガルーなどの大型動物の足の骨も含まれる。ブラウン自身や、このコレクションを管理してきた諸機関とその担当者が、100年以上にわたって人骨であることに疑問を抱くことなく、これまで一度も形質人類学や解剖学、あるいは化学的分析をおこなってこなかったという事実は注目すべきであろう。ブラウン自身が通訳の言葉として、自伝の中で食人習慣を紹介したことにもよるが、「未開」「野蛮」といった他者像と共に、食人行為の遺物と槍の組み合わせをこれまで半ば当然視してきたわけである。その意味では、「南太平洋の文化遺産」（石森 1999）は過去の文化だけでなく、「過去の文化へのまなざしの歴史」をも今に伝えていると言えよう。

17） 1898年、シドニーで開催された第7回オーストラリア科学振興協会大会で、ブラウンは初めて発表している。

18） ストッキングによると、「フィールドワーク」という用語を人類学に導入したのは，ハッドンであったらしい（Stocking 1995：114）。

文　献

Brown, George

1908 *Pioneer-Missionary and Explorer, An Autobiography : A narrative of forty-eight years' residence and travel in Samoa, New Britain, New Ireland,* New Guinea and the Solomon Islands. London : Hodder and Stoughton.

Coombes, Annie E.

1994 *Reinventing Africa : Museums, Material Culture and Popular Imagination*

in Late Victorian and Edwardian England. New Haven and London : Yale Univ. Press.

Deane, Wallace (ed.)

1933 *In Wild New Britain : The Story of Benjamin Danks, Pioneering Missionary.* Sydney : Angus and Robertson.

Edmond, Rod

1997 *Representing the South Pacific : Colonial Discourse from Cook to Gauguin.* Cambridge : Cambridge University Press.

Ellis, William

1967 (1829) *Polynesian Researches.* 2vols. London : Dawsons of Pall Mall.

Eves, Richard

1998 Commentary : Missionary or Collector? The Case of George Brown. *Museum Anthropology* 22 (1), 49-60.

Fletcher, Brunsdon

1944 *The Black Knight of the Pacific.* Sydney : Australasian Publishing Co.

Garber, Janet

1994 Darwin's Correspondents in the Pacific : Through the Looking Glass to the Antipodes. In R. MacLeod and P. F. Rehbock (eds) *Darwin's Laboratory : Evolutionary Theory and Natural History in the Pacific,* pp.169-211. Honolulu : University of Hawai'i Press.

Gathercole, Peter, and Alison Clarke

1979 *Survey of Oceanian Collections in Museums in the United Kingdom and the Irish Republic.* London : UNESCO.

Gunson, Niel

1994 British Missionaries and Their Contribution to Science in the Pacific Islands. In R. Macleod and P. F. Rehbock (eds) *Darwin's Laboratory : Evolutionary Theory and Natural History in the Pacific,* pp.283-316. Honolulu : University of Hawai'i Press.

橋本和也

1996 『キリスト教と植民地経験：フィジーにおける多元的世界観』京都：人文書院。

林　勲男

1999 「南海の失楽園－－西欧近代におけるタヒチへのまなざし」春日直樹編『オセアニア・オリエンタリズム』pp.53-80, 京都：世界思想社。

石森秀三

1988 「福音と殺戮、そして民族学－－ジョージ・ブラウンの生涯－－」『民博通信』40, pp.40-60, 大阪：国立民族学博物館。

1999 『南太平洋の文化遺産：国立民族学博物館ジョージ・ブラウン・コレクション』大阪：千里文化財団。

Kaeppler, Adrienne L.

1978 *Artificial Curiosities: An Exposition of Native Manufactures Collected on the Three Pacific Voyages of Captain James Cook, R..N.* Bishop Museum Special Publication 66. Honolulu: Bishop Musuem Press.

1979 Tracing the History of the Hawaiian Cook Voyagae Artefacts in the Museum of Mankind. *British Museum Yearbook*, 3: 167-186.

Kuper, Adam

1988 *The Invention of Primitive Society: Transformations of an Illusion.* London and New York: Routledge.

Langmore, Diane

1974 *Tamate---a King: James Chalmers in New Guinea, 1877-1901.* Melbourne: Melbourne University Press.

1989 *Missionary Lives: Papua, 1874-1914.* Honolulu: University of Hawaii Press.

MacLeod, Roy and Philip F. Rehbock

1994 *Darwin's Laboratory: Evolutionary Theory and Natural History in the Pacific.* Honolulu: University of Hawai'i Press.

Nason, James

1987 The Determination of Significance: Curatorial research and Private

Collections. In B. Reynolds and M. Stott (eds) *Material Anthropology : Contemporary Aproaches to Material Culture*, pp. 31-67. Lanham, Mary Land : University Press of America.

Pearce, Susan M.

1973 *Arts of Polynesia.* Exeter Museums Publication 72. Exeter : Royal Albert Memorial Museum.

Reynolds, Barrie

1986 Artifactual Documents : Ethnological Museum Collections as an Ethnohistorical Resource. In D. Wiedman (ed.) *Ethnohistory : A Researcher's Guide.* Studies in Third World Societies, no.35. Williamsburg : Department of Anthropology, College of William and Mary.

Rubel, Paula G. and Abraham Rosman

1996 George Brown, Pioneer Missionary and Collector. *Museum Anthropology* 20 (1), 60-68.

1998 Response to Richard Eves. *Museum Anthropology* 22 (1), 61-63.

Smith, Bernard

1985 *European Vision and the South Pacific.* 2nd ed. New Haven : Yale University Press.

Specht, Jim

1987 The George Brown Affair Again. *Anthropology Today* 3 (4),1-3.

1993 Museums and Cultural Heritage of the Pacific Islands. In M. Springgs, D.E. Yen et al (eds), *A Community of Culture : The People and Prehistory of the Pacific.* Occasional Papers in Prehistory, no.21, pp.266-280. Canberra : Dept. of Prehistory, RSPS, Australian National University.

Stocking, George W. Jr.

1987 *Victorian Anthropology.* New York and London : The Free Press.

1995 *After Tylor : British Social Anthropology 1888-1951.* Madison : University of Wisconsin Press.

Strahan, Ronald et al.

1979 *Rare and Curious Specimens : An Illustrated History of the Australian Museum 1827-1979.* Sydney : Australian Museum.

Thomas, Nicholas

1991 *Entangled Objects : Exchange, Material Culture, and Colonialism in the Pacific.* Cambridge and London : Harvard University Press.

1994 Licensed Curiosity : Cook's Pacific Voyages. In J. Elsner and R. Cardinal (eds) *The Cultures of Collecting,* pp.116-136. London : Reaktion Books Ltd.

Watling, Dick

1982 *Birds of Fiji, Tonga and Samoa.* Wellington : Millwood Press.

Webb, Virginia-Lee

1995 Illuminated Views : Photographs of Samoa by Rev. George Brown. In C. Blanton (ed.) *Picturing Paradise : Colonial Photography of Samoa,1875 to 1925.* Florida : Daytona Beach Community College.

Williams, John

1837 *Narrative of Missionary Enterprises in the South Sea Islands.* London : J. Snow.

Williams, Thomas

1858 *Fiji and Fijians.* 2 vols. London : A. Heylin.

未出版資料

Brown, George

Journals, Letterbooks, Ethnological and Scientific Papers. MLA1686/1-32. MLMSS 263/1-2. The Michell Library, Sydney.

新聞

Sydney Morning Herald 9 April 1917